世界婦人

●本誌は世界主義を標榜して婦人解放を主眼とす

家庭ストライキ

堺利彦

ストライキは同盟罷工、若しくは同盟罷業と譯せられて居る。學校生徒がヤル場合には同盟休校となる。要は多數の者が團結の力に依つて權力者に抵抗するのである。

學校生徒個人々々としては、校長や教員がドンナ無理を云つても、只ヘイ〳〵と服從せねばならぬ。然し何百人の生徒が一致團結して同盟休校をヤル場合には、校長や教員の方で弱つてしまふ。

勞働者一人々々としては、雇主に對して只もうヘイ〳〵と服從するより外はない。然し何百人、何千人の職工や、坑夫や、事務員が同盟罷業をヤル時には、さすがの金持も、さすがの資本家も狼狽を極める。

右二種のストライキは近來殊に頻々として日本全國に起つて居る。所が今又新に一種のストライキが流行しはじめて來た。それが即ち家庭ストライキである。

下女の拂底は近來到る處での話の種である。下女に逃げられた奧樣の顏色を見るほど痛快なものはない。自分が人使ひの道を知らない事は棚にあげて置いて。『如何に無教育な者とは云へ、跡の迷惑も考へないで實に無責任極まる』など、柳眉を逆立てゝは見るものゝ、實は世間體も惡し近處の思はくも恥かしいので大きに悄げながら不承無性で水汲などに出かける所、逃げた下女が見たならば定し溜飲を下る事であらう斯くの如き、醜婦と下婢との爭ひの爲に西洋では下婢組合、若しくは家庭勞働者同盟といふ樣な者が出來て、其の團體の力に依つて雇主と對抗する事になつて居る。日本ではまだ其處まで進んで居ないが、然し上流社會の家庭に於て、御飯炊、仲働、小間使などが數名、若しくは十數名雇はれて居る處では、それらが一致團結して同盟罷業をヤル場合がある。新聞紙でも毎度そんな記事を見た事があるし、又實際にも見聞した事がある。

是は實に有力な反抗方法で、もしや二人三人の女中でも、同時に忽然として『暇を貰ふ』事になれば、主家の當惑は知るべしである。若更に、玄關番、車夫、馬丁の類が此同盟に加はるとすれば、一段の妙である。

然るに兎かく世間の雇はれ人たる者は、謂はゆる雇はれ人根性として、己れ一人ぬけがけに旦那樣の御氣に入らうとか、奧樣に目をかけて戴かうとか、そんな事ばかり考へて、他の朋輩と睨みあつたり、嫉みあつたり、書生は下女をいぢめたり、下女は書生を馬鹿にしたりするのが常である。

若し彼等の眼が追々に醒めて來て、御飯炊も、仲働も、小間使も、玄關番も、車夫も馬丁も、皆是れ同じ勞働者である。同じ雇はれ人である、同じ哀の身の上であると覺つて、其の共通の利益の爲に堅く一致團結して、同盟反抗を試みる事となるならば、彼等の權利は忽ちにして大いに伸張せられるに違ひない。

予は斯くの如き家庭ストライキが頻々として起り來らん事を希望する者である。

小笛日記

有秋生

十月一日　妻女兒を分娩す、小笛と名く、いゝさふゑは其音ソフイエに似たり、ソフイエ、ペロウスカヤの如くなれとの心なり、母子共に健全。

同二日　報を傳へ聞きて、朝來、福島女史、酒口夫人、荒山の御老母など來り、何かと世話を燒る、同志の諸君も御祝ひやら、手傳ひやらに、續々と推しかけ來る、主人は聊か有難迷惑なり、産室には産婦嬰兒靜に眠り居れり、午後平穩。

同三日　京都より伯母上來る、孫が生れた樣に思へるなり、態々來て下さらんでも宜つたに、最う博覽會もないのに、見物に御伴する樣な處もなしと言へば、伯母上、何の孫の顏を見れば、見物などは澤山なりと言はる、今更の樣に好いお伯母さんなりと思へり、午後醫師産婆相前後して來る。

同四日　産婦も稍元氣附きたり、其白く細りたる腕に、愛らしき小笛を抱て、乳房含ますするを見れば、あゝ夢ならず彼女は早や人の母なり、心地如何にやと言へば、今日は快よしと言いたるまゝ、唇に喜の色を堪へ眠れる小笛の顏を俯す眺め入る風勢なり。

同五日　午前、酒口君來る、例の快笑四隣を驚す底の快談も出です、至極眞面目に、種々と心配して呉れらる。午後大杉夫人、同志婦人を代表して來られ、紅色メリヤスの初着やら、涎かけやら、種々の品を寄贈して行かる、此の夫人も近き中に母たられんとする婦人なり。

同六日　妻よ、兒を得たる喜に比す可き喜び世にありやと余は問ふ、妻は微笑て答えず然れど而して彼女は深く沈めり、何をか思へる、眼瞼には、露さへ宿れり、小笛の顏に濺きもせば、驚きて目覺んを。

同七日　「露國の裏面」を讀む、左記事あり此日は一天拭ふが如く晴れ、皚々たる雪は人畜白骨に反射して、何となく凄絶の氣に充ちたり、軈て一行も事なく式場に着せしが、陛下には龍顏美はしく式を了り即時還御を仰出されぬ。

（中略）一行はカタリナ溝渠の荷上場を去る殆ど三百歩許の處まで進行せるに、忽ち列の四周は雪と砂塵と、朦々たる硝煙を以て閉され、轟然として一聲の爆聲起りぬ、ペロウスカヤはリスサコフをして先づ、第一彈を投せしめたるなり。

（中略）陛下は忿怒の情に堪えやらず、侍者の止むるをも聽せ給はず、負傷者に向ひ、兇漢何れにありやと問ひ給ふ、己にしてコツォ大尉はリスサコフを捕へたれば、陛下はドヲルイッキー大佐と共に兇行者の前に進み給へり、捕はれたる人の面前三歩の處に立ちて、陛下は大尉に問ふ、此者なるか、大尉曰く然り、帝はリスサコフの面貌を一瞥して、身を慄はして曰く、立派なる人よな、帝は玉歩を返し給へり。

彼等は此時、荷揚場の柵に倚かゝりつゝ、帽子を頂きて拱手せる怪しき一青年に氣附ざりし、帝の歩は、次第に此青年に近きぬ、今や、其の袖と袖に相觸れん許りに進み給へる時、遙に立ちしペロウスカヤは手巾を振れり、青年は咄嗟に、其頭上より閃めける一物を帝の足下に投せり爆然として、火山一時に湧き、紅の雪は飛沫をなして噴煙の裡に閃めけり、陛下は其兩脚を粉碎せられて、地上に斃れ給ひぬ…………。

讀み了りて余は産室に入る、我小笛は靜に眠れり。

同八日　初て小笛を抱く、昨日讀みしソフイ、エ、ペロウスカヤの事績は、今も尚面前に髣髴たる心地す。

小笛よ、小笛よ、主義の爲めに活くとは名のみ、世に在て、何の事業をも成し得ざりし父は、せめては汝に、其理想を嗣がしめんと思ふなり、我小笛よ、怨むる勿れ、我が小笛よ、父を怨むる勿れ。

同九日　小笛は日一日と成長す、然れど、彼女は、ペロウスカヤの如く亦短命なるべし。

狂ひては

手塚吉重

狂ひては醉ひては猛くかたれども
　涙の光を悲しと哭きぬ

名譽を問はず才を思はず容貌を見ず
　たゞなさけある君をこそ戀へ

なにごともまだ言ひも見ぬ君とゆく
　わひ〳〵傘の夜の道かな

さなりせば人の咎めはなきものか
　われも男の子など生れこむ

花落つる夕の窓に頬づえして
　涅槃の鐘音の行方をぞ思ふ

振袖のながき袂の先にだに
　觸れんとぞねがふわが心かな

人しれぬ愁もつ子のありぞとも
　振袖ながき君は知らじな

若けれど人妻なれば花影に
　蝶追ふさまもつゝましきかな

紫の匂えるなかのくれなゐは
　額田女王がおん裳かも

うら若き乙女うらみて逝く如き
　思ひするかな花ちる夕

二人して笑みてし岡に二人して
　あゝいつの日か泣かんとすらん

さりとては人の情のつらきかな
　五百里さはく旅たゝん今

さりながら死なんの決心われにかたし
　幸くとはかり顔おほふ君

初秋や灯さらで歸る灯とり虫の
　われならなくに行方見つむる

浮れ男が唄聲とほくさえゆきて
　月かたぶきぬ三里松原

ものゝけの話しにふけし寂寞の
　夜半を破る木がらしの風

心なく空うち仰ぐ乙女子の
　瞳にやどる夕づゝの影

つかれては馬の脊をかる少岐蘇路や
　馬籠の驛は夕しぐれして

門川の瀨の音たかしうたゝ寐の
　手枕さむき大岐蘇のやど

一人する岐蘇の旅籠の破行燈
　行燈の紙に歌かいて見る

山深き雲のたえ間を馬追ひて
　藪原乙女唄うたひゆく

●女子大に讀むべく男子盛んに讀まさる可からず

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

海外時事

男子選擧人の腐敗

英國ウヲルセスターにても議員撰擧人の腐敗は甚しく、人をして代議政治の前途を危ぶましむるものあり、近來に至り此勢殊に烈しく投票の賣買は排れ浮まぬ一種の取引となり、之が爲め生ずる裁判沙汰の増加のみにても著しきものにて市民の裁判費負擔は之が爲に一磅に對する三片半に増加したり、英國にては女子は國會議員の撰擧權を有せざるを以て、右の責任は撰擧權を有する男子自ら當らざる可らざる所なるに、之が費用の負擔に至りては女子も男子同樣に課税せられたるより、ては不都合千萬なりとの議論沸騰し此程ケンブリッヂに開かれたる女子撰擧權獲得の爲に運動せる諸團體の組合委員會の一問題となり、一面ワイリツプ、スノーデン氏より議院に質問を提出し、同時に一運動試む可き準備中なりと

芬蘭の女子革命家

フインランドに於ける女子社會主義者の運動は三個の女傑を擁して頗みに活氣を呈せり、ミムミ、カンテルフヲ孃、マリア・ラウニヲ孃及びミルナ・シランパー是れなるが、其中ミルナ・シランパーのみは夫を有すれども他は何づれも未婚なり、シランパー夫人は當年四十歳にて驚く可き精力を以て社會主義婦人の團結に勉め、全國到る所に遊說して社會主義婦人組合の支部を建設しつゝあり、又た目下はヘルシングフヲルスの社會主義婦人新聞の記者にして、同組合の中央委員會議長たり、夫人の手になりたる傳道用の小冊子類も少からずと云ふ、ミムミ・カンテルフヲ孃はアボーなる一農夫の娘にて秀麗花の如き小女なれども、フインランドの社會主義運動ありてより未だ彼女の如き急進的の社會主義者を見ずと云ふ、彼女の學問は全々獨學にて仕上げ、雄辯は天才とも稱す可く、一度び花唇を開かば熱烈なる革命的火焔を以て灼き盡さずんは止まず、此程アボーに女子勞働者の集合を催ほし數千人の聽衆に對して一大演說を試みたるが、其最後は『吾人の社會的壓制者を粉碎せよ、社會主義婦人組合萬歲!!』の一句なりしと

女子の裁判官

米國イリノイス洲エヴアンストンにては投票の結果、カザリン・マツカロツクと云ふ一婦人大多數を以て法官に當選したり、同婦人は四人の小供の爲には善良なる母として聞えあると共に、法官として最も其職に適したるものなりとの評有力なる、法曹仲間に專らなり、婦人は廿一年間法律家として活動し、郎君のマツカロツク氏も其社會に名を知られたる法律學者なれども婦人マツカロツクは之にも劣らぬ造詣なりと

愛兒の復讐

乳兒死亡のことは近時重大なる社會問題の一つとなり居れるが、一昨年中英國にては一歳未滿にて死亡せし乳兒十二萬人に達し尙は年を追ふて増加の傾向あり、之れ一般の醫術及び衞生思想の進歩の完全ならざるにも依る可けれど、此增加の傾向は主として女子の過激なる勞働の結果と、間接には工場勞働制度が全く勞働者の家庭を破壞せしに依るものなり、此事實は近來英國の女子を震慄せしめ女子協同組合の如きは之に對して一般女子階級の注意を喚起す可き小冊子を發行したるが、其一節に曰く『乳兒に對して爲す可き貢獻の一事は母を與ふるにあり』と、然り、資本家制度は乳兒より其母を奪ひ、母より其乳兒を奪ひつゝあり女子たるもの、之れが復讐を試ろみざる可からず

海内時事

晩香波に於ける日本人排斥運動の暴戻極まる事實は諸新聞紙上で諒承する事ですが、其すぐお隣りの合衆國でさへ、彼の『ワシントン』や『リンコルン』なぞが人道を絶叫して、七年といふ長の月日骨山血河の悲慘を極めたる結果に、わがない得たる賜物を今や漸く忘れて、徒らに人種問題や權力爭ひに、世界同胞の大義を沒却せんとした位ですもの、堂々たる大帝國を標榜する彼國の態度としては、左程不思議とも思はれ不申、アヽ實に世は大審判を促がしつゝあるに候はずや

老車夫問題は其筋におかせられても、彼等の現況に徵し到底此際廳令を遂行し難しと感じ玉ひてか、無期延期の報を傳ふ、是にて老車夫君も焦眉の急を免かれ、定めて愁眉を開かれたでしそう、吾々勞働者も此報を得て實に歡喜に堪へませんでしたが、併し老人をして、いつまでも、車夫てふ勞働に從事せしむる事は人道に反する事として排斥せねばならぬのです、現社會の有樣では老人でも働らかねば糊口する事が出來ぬから、據此業に從事せねばならぬが、吾々の主張する如き社會が出來れば、老人は老人で皆適當なる仕事に從事せしめ決して無理な勞力を強ひ、それを怠れば餓死せしむる樣な事はないのです、社會主義者の主張は兎に角此の世の中に生存せるものに衣食の安全を與ふるを以て一大要素とするのですから、詳しい事は諸先生の社會主義的著書に依りて御研究なさい、さすれば斯かる時事問題も直ちに解釋出來ましやう

●男こ夫を斬る

……離縁されたる恨み……

山梨縣南都留郡下都留村前田まと(？)は昨年一月二十七日神田區小柳町三十番地林某の世話にて本所區石原町九十四番地小間物商木口茂平(五十)の長男藤太郎(廿七)の妻となりしが兎角に女に有るまじき粗暴の擧動多きのみか剛情にして嫉妬深きより屢々離縁話ありしも媒介者の仲裁にて事無かりしに去五月廿七日頃まとより何か無心を言ひたるが元となり藤太郎は世帶をたゝむ故お前も故郷へ歸れとて既に媒介者及びまとの母なる小石川區大六天十四番地高山千代立會の上今後決して世帶は持つまじく店も疊むべし萬一世帶を持つこともあらば再び其旨を通知するの約束を結び正式に離緣しまとは郷里なる前記下都留村に歸りたり然るに藤太郎は現住地芝區三田四國町四十八番地に移轉し相變らず小間物店を張り世帶を疊む所か立派に商賣を營みて居れるをまとは風の便りに聞き込みさては欺かれしか此上は如何にもして元の通りにならんものと上京して前記高山方に泊り本所區の住所を尋ねしに移轉してあらざるより豫て内職に帽の製造をなし居りし際該を買求めし近所の雜貨屋を尋ねたるに小僧は朧氣ながらに芝區志田町邊りに移轉せし旨語れるにぞ雀躍して再び同日途中の金物屋にて廿五錢を投じて剃刀を買求めて懐にし其足にて芝白金志田町に至り木口方を尋ね當てて樣子を窺へば案に違はず夫婦共稼ぎして買求めたる當時の家具を麗々しく飾り立てあるに短氣のおまとは怒りに矢も楯も堪らず座敷に案内もなく上り込みて藤太郎に其違約を詰りしも藤太郎は正式に離縁せるもの故若し話しあらば媒介者の手を經て申込めと云ふも聞かず復縁して呉るゝか若しくは金を出せと怒鳴り散し藤太郎の立上らんとするや己と云ひさま懐中したる剃刀を取出し頸より口内に貫通する重傷を負はせ逃出す處を再び腕に斬り付けたる騒ぎに裏口にて涼み居たる茂平は座敷に飛込みまとの後ろより抱き付きおまとは前より手を掛けて茂平の額に數ヶ所の傷を負はせたるが兩人は倶必死となり取押さへんとせる所へ二階へ同居せる神奈川縣足柄下郡溫泉村高木かつ(五十)も驅付け手拭を剃刀に突きつけて奪ひ取り漸く取押へて警官に引渡したり負傷せる父子は目下松山病院にて治療中なるが生命には別條なかるべし

如上の事實を讀んで憤慨せざる婦人は(或先生の口調を借りて)精神的不具者なり、怠惰者なり、先天的奴隷なりと申さねばなりませぬ、記者も此まと子が行爲につきては全然敬服するのではありませんが、凡そ世上の具眼者と稱する人々は概ね婦人の行爲を責むるに酷にして男子に寛なるは、如何に精神麻痺せる婦人と雖も首肯する事は出來ないでしよう、それゆへに此まと子の上に於ても、世間大なる誤解あるべしと思へば聊か吾が所見を陳ずるも不可なかるべしと思ひ殊更こゝに掲載せし次第ですが、讀者諸君も御承知でしやうが、支那人も糟糠の妻は堂より下さずと申せし如く、ほんに思ひ做はれて、二世と誓ひ、經濟上の苦痛も君ゆへならばと一生懸命に働らき、生活の保全を得て友白髪の樂を夢たりし甲斐もなく、假令媒介苟且しかも一旦離緣するに至りては如何なる溫良なる婦人と雖も能く忍び得べきものならんや、畢竟まと子をして、斯かる行爲に出でしめたる所以のものは、たしかに其男たり其夫たるものの、彼女に對し冷酷なる所置ありしに憤慨して、斯かる暴動に出でしものならん、彼女にして、教育あり又敬虔の道を知らば、斯かる犯罪に觸れて迄も鬱憤を霽さずして、何とか、他に好法もありつらんに、其心中を察せば寧ろ同情の涙なからんや、吾は賢明なる判官諸君に希ふ、願くは現社會の道德や法律が婦人を責むるに酷にして男子に寛なる現況に鑑み玉ひて彼女を審判せられん事を切に祈るものなり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

買淫夫と賣淫婦

赤羽生

齒に衣着せたる如き曖昧の事を言ふは余の大嫌とする所なり、故に余は劈頭第一に宣言して置く、曰く今の世の男子は悉く買淫夫なり、今の世の女子は多く賣淫婦なりと。

然れども余は、男子の悉くが買淫夫たる故に輕蔑する者にあらず、又た女子の多くが賣淫婦たるの故を以て、愚弄する者にもあらず、要は唯だ今の社會組織、産業制度宗教、道德、政治、法律等が今の社會の男子と女子とを驅つて買淫夫、賣淫婦の境遇に陥落せしめたるを憤り、而して此の社會制度、經濟組織の犠牲となれる、今の世の兄弟と姉妹を憫れみ、更に進んで如何にせば、斯の可憐なる買淫夫と賣淫婦を救ひ得べきかに就て、聊か卑見を吐露せんと欲するのみ。

少しく眼識ある者は、今の社會制度、經濟組織の各方面に瀰漫せる不備、欠陥、悖理、矛盾を言はざるは無し、而して此の不備、缺陷、悖理、矛盾せる社會制度中にありて最も不自然、不合理なるは男女關係、殊に結婚制度なる事も又た識者の知る所也今の世の男女關係は、虚僞と虚僞との戀愛なり、肉慾と肉慾との交換なり、其間に何等の眞純善美なる精神を發見し得ざる也、如是き僞　醜なる男女關係中、殊に甚しく僞惡醜を極め居れるは男女の結婚なり、男子の女を覓めんとする、先づ生活の顧慮な擔保として、自己の性慾を滿足すべき美にして艶なる婦人を要求す。女子の男子を覓めんとする、先づ美容と温良と、貞操を犠牲として、男子の提供する生活の保證と交換する也、如此くにして男女結合の最大必要條件たる愛情を閑却せられて泥土に委せらる、即ち男子の側より言へば、生活の保證を以て女子の肉體を買はんとし、女子の立場より見れば、生活の爲めに自己の身體全部を男子に賣らんとするなり、買淫夫、賣淫婦にあらずして何ぞや、佛國の社會主義者フエリーが嘗て論理學上二個の否定は一個の肯定を生ずるが如く、現在の結婚に於ては二個の賣淫を一個の美德として考ふと言ひしは最も剴切に在來及現在の結婚制度の上に一大痛棒を喫せしめたるものにあらずや

如此く現社會に於ける男女の結婚は、愛情を根本義とせずして、生活を最必要とせり、男子は生活の資料を供給して女子を購ひ、女子は愛情なく趣味なき生活を得んが爲めに自己の全部を擧げて男子の翫弄に供す、されば生活の資料を多く有する富める者は、幾人たりとも心の儘に女子の肉體を購ふを得、生活の資料を有せざる貧困なる女子は、心ならずも自己の神聖なるべき筈の肉體を許多の男子の翫弄に委せざるを得ず、多錢善く女子を買ひ、貧困善く男子に賣るは現今の男女の浅ましき狀態なり、而して所謂る娼妓なる者は、生活の爲め一時的に淫を切り賣りし、貴夫人、家持女房なる者は、少くとも永續的に男子に賣淫す、一時と永遠との差はあれども生活の爲めに賣淫するに到つては即ち一也、エドワード、カーペンターは現今の婦人を分類して貴婦人、家持女房、賣淫婦の三種と爲したり、然れども、寧ろ此等を一括して生活の爲めの賣淫婦と稱するの論理的妥當なるには如かず、然り今の社會の女子は皆な生活の爲めの賣淫婦なり、若し強ゐて區別し得べくんば、高等賣淫婦、中等賣淫婦、下等賣淫婦と稱するを適當なりとす、カーペンターの所謂る貴夫人は高等賣淫夫にして、家持女房は中等賣淫婦、賣淫婦は下等賣淫婦たるなり、弱肉強食、優勝劣敗、動物的自由競爭を根本の主義とする今の惡社會に於ける女子の運命又哀しからずや。

轉じて男子を見る、之れにも又た高等買淫夫、中等買淫夫、下等買淫夫の三種あり切々として衣食に追はるゝ賃銀奴隷が、其の機關的勞働に依て僅に剩し得たる若干の金錢を以て狹斜の巷に一夜の春を買ふは下等買淫夫なり、餘り富裕ならざるも兎に角小家庭を組織し得て、美にして賢ならざるも一人の女子を占有し得るは中等買淫夫なり、金力と權力とに任せて到る處に女子を購ひ、幾多の美人を獨占して手活の花と眺めつゝあるは高等買淫夫なり、下等買淫夫は貧民、勞働を意味し、中等買淫夫は中等階級に属する平民を意味し、高等買淫夫は所謂る貴族、富豪を意味す、而して下等賣淫婦は下等買淫夫、中等賣淫婦は中等買淫夫、高等賣淫婦は高等買淫夫と、各々其の配合の當を得たるは頗ぶる面白しと爲さゞるを得ず。

あゝ今の社會は男子をして悉く買淫夫たらしめ、女子をして多く賣淫婦たらしむる社會也、這は個人的自由競爭主義よりして當然に生ずる平民階級の貧困無力と、權力階級の富裕横暴と、男子の專權と女子の卑屈との結果なり、吾人は有爲なる女子諸君と共に如是社會を憎まざるべからず、呪はざるべからず、而して如此き社會を改革するに努力せざるべからず

引越

岡野活石

引越は嫌だ、厭でならぬ、今度こそは永住とは行かなくとも暫くは落附いて居やうと思つても、又た引越さなければならぬことになる。

人は長く附合つてる間に其の人情を白狀してしまふ、お互に隠し、僞り、欺き合ふのは知らぬ間のことだ、長く留まつて居たところでは近所合壁皆一家のようになる、御飯が無ければ持つて行く、お小遣を持つて來る、全く遠くの身内より近くの他人だ貧乏生活の吾々には向ふ三軒兩隣より力になるものは無い、それをやつと知り合つて心も落附いたばかりで、また引越して行くのは如何にも心細い、今度の家主はチツとは涙があるだらうか、近所の人達はどんなだらうか？。

自分は引越しとなると何時も引越先を捜し馴染になつた近所に別れを悲しむで煩悶するのだ、今度またこれで苦んだ。

敗殘の痩躯を母と妹とでやつと行つて居た、小ポケな下宿屋の空間の一つに備へた自分は、また此所も落城と來て、全く地に塗れてしまつた、で、暫時世を忍ぶためにさて潜り込んだのは場末の奥、鶏犬の聲は山の手線の汽笛と相和し、大概に俗論を怒鳴つて歩いてもお巡査の小言一つ受けない畑の中の、また森の下であつた、家主といふのが態も振りも一若頓着なしに働く一方のお百姓、その屋敷内で隠居所にでもと思はるる、がつしりした造り、今迄家主の隣りで散々應待されて、懲り／＼して居るのにまたかとギツクリしたが、恐る／＼して居られぬから、兎に角、一興を据えた。

しかし、自分の杞憂は無駄だつた、家主といふのは温い樸家で近所での評判の好人物、屋賃の一月や二月滯つて居ても何とも言はれないので、これまで晦日が一日遲れても、矢の催促を受け、半月も待たせうものなら店立てを喰つた自分等には命の延びる思がした、年中屋賃なしに住むことが出來たら、どんなに心が悠然することだらう

主人は五十ばかり、妻君といふのも中々の働き手、廿ばかりの娘を頭に、次に十七ばかりの男の子、その下が十ばかりと六つになる腕白小僧、その娘といふのが、大柄な色は少し黒いが、大きい目に温和な、人なつこい顔が満ち充ちてる丸ポチャ、それが如何にも平民的で、あのソバ褌の皮を剝いだやうなツンツンシタ顔してる、貴婦人とか令嬢とかのやうに、階級的驕慢の影が少しも宿つて居らぬところが、まことにうれしい。時に白い手拭姉様被りに、水色の襷十字に綾取りて畑に出ることがある。自分は此所に移つてから丸三月、此娘とも知り合つて近しくなつて來ると何とも曰へぬ温かい感じがする、親しさを覺えて此所前から受けた迫害も損手も忘れる

その後自分は辛ふじて食ふだけの職業を見出した、勤先は[illegible]町、この巣戰からは、甚だ遠い、柔弱な自分にはとても通ひ切れぬ、どうしても近くへ引越さねばならぬこととなつた。嗚呼親しくなつたのにも畑にも別れて、また憎らしき家主の苦を忍ばなければならぬかと思ふと、未だ見ぬ恐ろしくもあり、いよ／＼此所を去りたくなくなる、けれども、自分の職業は、自分一家の命の綱である、一日休めば、生活が一日止まる譯なのだ、アヽ移らうか？。

しかし此家主や、あの娘を思ふと、どうも引越すのはいやだ、寧ろ止そう!!。

だが、あの長い道を往來く、疲れ切つた身體で五寸三寸づゝ刻んで來るのがホントに辛らい、一町でも宜い、二町でも宜い、近いところへ行きたい、どうしても移らうと幾度か思直し、考直してこゝに最後の決心をした、愈々此の家も明日からは他人の家となるかと何となく淋しく、あの植込みした松の枝が、俺か惜しい。某々學校へ通ふお隣の妹君が今歸つて來た、彼の女の海老茶袴も戀しい、茄子畑一枚隔てた前の娘さんが、裏の井戸で、甲斐々々しい水仕事に、お別れが惜しまれる

とう／＼自分は、之等を振り切つて引越を斷行した、これで從來の安逸が出來る譯だしかし、心の苦痛と何方だらうか、

おそばを配つて近所へ仲間入をした、近所では隣保、猜疑の目を以て卑しむかのやう嘲ふかのやうに迎えて呉れる、アヽ嫌だこの日附が癪に障つてたまらぬ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

避暑日誌

飯倉比呂子

ふみ月二十日あまり五つの日少しの閑暇のゆるしを得てたき子嬢とあさましき調度もそこ〳〵にさし七つになる一子順を伴ひて兩國より汽車にて九十九里の濱に向ひてかしまたちせり汽車は千葉にて房總線に乘りかへ亦大網にて更に乘りかへて午前十時頃東金へつき先づ此處の親戚をおとないしに主人はいまさず老たるふた方の出迎ひて始めての事とていとねんごろにもてなし給はり是非に今宵は泊りてよとのたまひたれどゆくてを急ぐ心とてひるげをすゝめられ午後二時と云ふにそこを暇乞して豐海村へと車を走らせぬ道のほど一里あまり行きたらんころよりおひ〳〵路惡しくなり車夫の脊も汗しとゞろにて乘り居るも心苦しく未だみちのりは二里ばかりありとの事されどそれはとは事かはと順のみ車に乘らしめ裾かゝげて歩を進めぬ夕方五時ころを以て豐海村の鈴木氏方へつきぬ家の人皆よろこびむかへき坊やはいまだ瓜西瓜の畑をしらざらんいざやいゆきて見よかしと向ひの畑につれゆかれたるに幼きが物めづらしくあれかこれかと未熟の瓜をもぎとるなどいと興ありのかぎりを盡せり夜に入りて鰹魚を漁りぬとて新鮮なる鰹魚の料理さても鯛汁等に空腹を滿たせ十時頃寢につきぬあけの日たき子嬢と其姉女おとゝもろともに海邊に貝ひろひにて網打などしてひねもす遊び暮して

　幼子が貝拾ふてよろこぶさまを見侍りて

うれしさはゝかり知られず幼子の
　拾ひし貝の一數つくすとも

　夜に入りて空すみ渡りて月のいとあかゝりければ海邊をたどりて

青海原うち出て見ればめもはるに
　浪のうね〳〵月やとるかな

風さよみ空には月の晴れにけり
　うき世のなりを浪にあらふて

など丶例の腰打一ツ二ツ其の次の日も磯に出て岸邊に貝をあさり沖の白帆をかぞへありきて長き日も暮るをはいなふ惜しみき三日目に至りしのゝめやう〳〵しらみしころおう〳〵と云ふ掛聲へぬ『今朝は漁がある濱を呼ぶ』と家ひとのものかたるにいさや、見にゆかんと起き出でゝうかひもはつろやおそしと磯に走りぬ此處彼處と人多く集ひて忍い〳〵聲して網を取り綱を引き上げあじさめなど網よりすくひ上げられそこにてうりかひをなしぬ家の人來てはつ〳〵とはねたる魚を買ひ取り家路に持ち歸りぬ我等もいそぎ歸りてそをいろ〳〵に調理して朝餉をなししばしやすらひて復た海邊へとさまよひ出でぬところの幼きわらべどものおとこおみなうちまぢりて游浴するを見ていでや我等も游水に游せんものと用意を出して水衣にきかへ膝のあたりまで入り始めのほどはおる〳〵と震へたりしが漸ぬさきこそ恐早のきらめ其處におち居ぬかくておい〳〵心ようなりゆきたればいや〳〵と云ふ順も抱き込みぬたき子はよせくる浪に浮き上りはた〳〵と游ぎ出し童子等もいとたくみに浮きつ沈みつ游びたはむるゝにわなか身にまれびえず只た淺きところに手をつきて足をばた〳〵と動すのみ順もまたされど順は僕はよく游ぎを得たりとしていとも得意氣によろこびぬかくて二三日を過しぬ三十日には關村なる亡き舅しうとめの墓おがまんとてたき起き出でゝあらましすひなさがるところとていづこも道路あしく來る時の車にこりてこたびは馬にせばやと舅より馬を頼み置きたるに五時に出で立たんとせしも七時を經るも馬來らず如何せしやさ一同心落ゐず門に出でゝは入り入りては出で待ち詫ぶる内漸やくに馬子來るにいざとて順をたつやくらに入れ一方へ調度かわごをつけ中央にたき子を乘らしめわな身は徒歩にて海岸を關村さして急ぎぬ道のほど二里斗り行きし處にてたき子と乘りかへひるまえの十時頃關村なるたき子の姉秋澤氏の家につきぬ其處にて饗飯の饗應をうけ車を雇ふて亡きたちねの墓に詣で二三の親戚に立よりこゝにてたき子と袂をわかち一里あまり隔たりたる千町村にまかりぬそこの河野氏は亡きしうとめの生れ給ひし家なればいつとても郷里に歸りたらん時おとなひまゐらするためしなるが此ほど農事にいそしき折柄とて從兄の君のみ家におわしき是非にいとよさ泊りてよとのたまふなれどせわしき時節にひまをかゝせさふらはんも心なし今宵は茂原まで行きてん馬か車を雇ひてよと頼みたるに車なし馬はあれと人を乘するにたえず農事に使ふのみしいて乘るも危うきとの事其内に日は入うはてぬさらば一泊せましと思ひしも順は如何にしても茂原まで行きたしと泣きせがみたれば已むなく順をばそこの女な子が背に負ひ荷物はあす屆けまゐらせんと云ふにぞ又二里あまりある茂原へまかりぬつきて見れば姑母上はいね給ひしも起き出で給ひ火どもし語などわかす其間に順の洋服脱のあれりより腹にかけ汗しとゞなるにわな身も亦たそなすゝぎて食事をとゝのへ寢むりにつきぬ此日朝に二里斗徒歩にてたどり夕に二里を歩みしかば疲勞いわんかたなし翌日昨日のつかれをいやさんとひねもすうちふし居など採ませぬ八月一日はとく起き出で順と姪なる貞子を伴ひて父上の墓に詣で三番の下り列車にて一の宮に甥の病氣を尋ね何かと語らひ居る内浮つまなる人も此處の司に用事ありて來りしに用事もすみてひるころ歸り來り是より一の宮川に投網もて鯉狩りをせんとまへかたより準備ありし事とて直ちに舟場に至り見しに既に漁夫等は川上に行きてあさり始め舟人の竿の手をぞしと追つき見るにいと嚴丈なる背に岩むしたらん如き漁夫四人にて木もて掩ひ茂れるケ所を細長き網もて遠卷きにまきせばめてかわる〳〵水底にくゞり入りて鯉魚をあさりおほよそ流れを一里程も獵りつくせどもあやにくにも潮水の工合にて鯉魚三尾鮒三尾をのみ得たるがあまりの本意なさに下流に行きて網打して鯔など得んとせしも是れ亦た小鯔をわづかに得しのみはや日も入りはてければ舟を高松館の棧橋につけさせぬ是よりさき此處の好意藤島氏來り待ち詫びしありさまなればいそぎ鯔を調理せしめて夜更るまで物語りして藤島氏は小舟に竿さして家路に歸り我等は此處に宿りぬあけの朝つまなる人は病中の甥を尋ねて歸京の途に就れわな身は共に二三日此處に逗留すべく此まりぬ或日海岸に至り見るに人々多く游浴すれどわな身とは浪あらくて入るべうもあらずさらば川にて游ばんと川に來りて蜆など拾ひて暮らしぬ其夜浪の音のいともの凄う聞へければ

おほつかないもやすくねずふら浪の
　わが枕へにをそひくるやと

歸路に亦た甥を訪ふてやしないものなどすゝめてゝなる落合氏を尋ねそれより茂原に引返し又一日を母上の膝下に暮らし俤りぬ母上は老後の隱居所を築造中とて心せわしく居給ひしにわな身は心なの遊興などゝありきわりたる罪のあしかりしを思ひうかめてすご〳〵とみやこのすまひへ歸りつきたる其夜十時と云ふに一の宮より電報あり

　マコトコトキレタオイデマツ

と病み居たる甥の身まかりしを告げこすなりき六日一番の汽車にてつまなる人は更に一の宮に向ひて立ち給へり人の世のはかなき實に夢なれや

別府の夜景

孤舟

夕べ寂しき青嵐
　松ケ枝荒ぶ岩岸に
白き乘私の鷗島
　夫婦か非ず兄、妹
双の翼を吹き折られ
　餓えに悩みに捨小舟
頼る邊渚の別府灣
　乾汲泉に湯浴する
敗餘衰殘悲し人
　神か御胸の慰めと
然れ哀れも我が友よ
　外ふエテンの自然の園
おれも人の子、姉妹
　我々の黄金に飾せらん
叫び苦しき一粒の
　血流る肉を刺す
巷に懐ふ笛の音
　まだうら若き按摩さな
病床に呻吟く妻や子の
　寂しき笑顔開かんため
港に檣柱林なし
　森城裏に鎖るも
悲しき人を哀れ子を
　國の柵者は知らずでか

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●農家理科（六）

增田操

ア、暑い〳〵と人間の裸體で居てさへ流汗淋漓、森の木陰に鳴く蟬の聲かしましく一層の暑さを添ゆるを覺ゆ吾れも人も氣死し魂蕩すてふ土用の最中、見渡す限り綠りの波を形づくる稻田の中に日除けにとて『ござ』を背に覆ひ『千兩捨ちより一文なしの好いたお方と共稼ぎ』を小唄の節面白く歌ひつゝ、二人の男女其一人は手拭を以て頭より頰を掩つた三十恰好の男、それに隣りて菅の小笠を冠りし二十六七の女は前なる男の妻であらふ、其地に續ける鎮守の森陰には十二三の小童、可憐なる幼兒を背に負ひ直徑三尺ばかりなる麥稈笠を阿彌陀に冠り手に何やら草花を綴りて背なる幼兒を慰めつゝ佇すむものは今しも田の草を除りつゝある母に乳を求めに來りしと見ゆ、更らに畦の上に起つ一人の老爺、今しも田より出で、足の未だ泥の儘ながら其腰より櫻皮にて造れる印籠形の煙草入を取り出し先づ眞鍮煙管を口に啣へ懷を探りて「マッチ」の火を移し口の邊より煙の立ち上るは煙草を喫すならん、渠れは白雨一過洗ひ上げたる稻葉を眺めては其株を押し分けそれに雜へる「ヒヘ」を拔き取り更らに足を以て水口の高低を加減し灌漑の水に過不及なかれと少時の憩ふ間さへ心を配りつゝ笠も手拭も脱ぎ捨てたるは彼の夫婦の親なるべく渠は田の中なる女を呼びて孫は飢へなん彼所に至りて乳遣れと命ずれども今暫時にて除草を終らんと慰め慊せど頑是なき小兒の聞かばこそ忽ち消魂ましく泣き立つるより渠は漸やく屈める腰を起てし體を轉して稻を掻き分け其田の傍なる小溝に步み寄り徐しく足の泥を洗ひ小童の起てる木陰に行き笠を脱ぎて下に敷き双手を以て胸を寛ろげ房々としたる乳房を摑み出し小童の背なる幼兒に示せば兒は手を拍つて喜ぶ、母は膝より下の濡れて未だ泥の其儘なれば小童の衣に觸れて汚さじと自から胸を前に反して突き出し起ちながら負はれたる兒に乳房を啣ませ右の手を以て其兒の頭を撫づれば兒も又乳房を啣みながらに紅葉の如な掌を擴げ母の顏を見上げつゝ打ち笑ふ、兒は喜べば親も樂しむ極樂淨土の畫圖に似たりこれ即ち親子自然の關係である斯く人間は自然に生れて自然に歸るのであるから人は常に自然と一致して居る、人はこの偉大なる自然に抱擁されて居るから自然には少しも背くことは出來ない、さらばこの自然に從ひ自然を樂しまねばならぬ筈だ、所で平生都門熱閙の地に喧囂せるものをして夏季は青山白水の邊を忍ばしめ彼の高樓玉殿に起臥して涼を納れつゝ尙ほ暑さに苦しみ酒池肉林に飽きて食の口に適はざるを喞つが如き富豪貴族と稱する奴輩が時と金とに不足がないから安息に依つて懶惰を思ひ或は須磨の浦曲に或は舞子の白砂青松に或は濱寺の海水浴に或は遠く北海の綠陰に避暑の名を冒して種々なる遊蕩事を演らかすこんなの時でも我々農民は背を炎天に曝らし流るゝ汗をも拭ひも敢へず隨分苦しい而も忙しいそれだけ農家では大切なる時季だ、たとへにも米を作る仕事は夏の四十日にあると云ふ位さ一生懸命に働くべき時である、而して稻は元來熱帶北熱帶地方の作物だと云へど温帶地方にして夏季温度高き地方には能く成熟するものだ我邦本土諸州は勿論北海道に於ても北緯四十三度半に至り栽培せられ朝鮮にては四十度支那北部にては四十二三度北部伊太利、匈牙利に於ては四十六度北米合衆國にては三十八度南半球に於ては三十六度に至ると云ふ、稻作は春季發芽に際し平均溫度攝氏十二三度夏季は二十二度乃至三十度を要し全生長期間の平均溫度は二十度にして其成長期の如き五六ヶ月を要し早熟種に至つては尙ほ四ヶ月より早きものありと雖ども其成長期に於ける總溫量は普通攝氏三千度乃至四千五百度を要するものである故に稻作は濕潤炎熱の氣候を愛するものであるから我邦に於ては夏季の高溫度は特に稻作に重大なる關係を有するものにして俗に土用布子に寒帷子と云ふが如き不順なる氣候は農家に於ける一大禁物である、だから夏時除草中は暑熱の一層甚だしからんことを祈るべきものである且つ除草するには深く土壤を堀り返へし能く地溫を高度ならしむるを要す、斯の如く其業に忠實なる平民階級は燻くが如き炎軍の鉾鋒に熱殺されつゝ尙ほ營々として生活難に逼り而も彼等富豪貴族の酒食の料を供給して馬鹿氣たる犧牲とならざるべからざるか同じく人間に生れて一は極樂淨土に遊び他は焦熱地獄に陷りたる樣だア、平民階級は何の罪科あつて斯ゝる運命の拙なき苦慘を嘗めねばならぬか記せよこれ自然に反せる現代經濟社會の壓制なる現象なるを、ア、覺醒せよ農民諸君!!

●萍

渡邊博

何ですつて、妾の身の上を話せと仰言るのですか、はゝ、身の上だなんて、貴方のお耳が汚れますわ、あら、汚れても構わないつて、では、お言葉に甘へまして、お話しいたしませう、まあ斯うなんです。

丁度わたしが十六の春で御座いましたよ、母様の里方で、主人の妻君がお逝去なり遊ばしたさうで、跡に殘りましたのが、その御主人とその方の實母さんで、他人水入らずで宜いようなもの、、實母さんが早く、孫を見せて呉れ、孫の面を見ぬうちは死んでも浮かばれぬと、常々申す所から、その御主人さんも、愛しい妻君に死別れて、何となく、掌の中の玉を落したやうに、心細い淋しい感じを起してお出でゝしたから、二つ返辭で、後妻を貰ふことゝなりました妾の父はこのことを何所で聞きましたものやら、妾に嫁けと申すのです、はいその頃妾の實母はこの世に居りませんでした、父は母の逝去られた當座だけは、不自由を堪へて一人娘の妾を相手に、鬼や角と月日を送つて居りましたが、遂々白粉臭い女を引張つて來ましたので……はゝ、話しが後やさきになりまして、嘸お聞苦いでせふが、はい憶へば庭の櫻の花が風なくて散る夕暮でした、父が何やらお話しがあるとのことで、少女心にも何んなお話であらうかと、急いで參つて見ますと嘸今申し上げました緣談のことでせふ、父の仰言るのはお前ももう妙齡だし、それに何時まで、家に居つた處が、詮方がないから、こんなことは渡りに舟だ、何うだ、承知して嫁くやうにしては、殊にお前のお母さんの家だし、お前に厭はあるまいと憶う申すのでせふ、それから父は語を續いで己の跡相續はあの爲坊があるから決して己などは心配せんでも可いだから、お前はお前だけに、早く好の結局を着けて呉れと申すのです、隨分ぢや御座いませんか、否え親を恨むのではありませんが、系統も判明ません女のお腹から出來た子を跡目相續にして妾は全然であるか無いかの扱ひ、肝心の父がこの通りでしたから、妾はもう情ない悲しい思ひを抱きまして、その夜妾は亡母の御墓に詣りまして泣いて泣いて泣きましたのよ、だけど冷たい石の墓は、妾の戀しいお母さんになつて慰めても、語つてもくれませんでした。

その翌日も、翌々日もヂッと考へて見ましたが、考へれば考へる程、わが身の薄倖なのか悲々と胸を刺すのでせふ、あゝ人間と謂ふものはホンに不運らないものだ、就中わが身は、家に居るとすると、あの女の面影……を、嫌な好かないあの子の世話までしなくてはならぬと思ふと、實際父の言を容れて嫁つた方が、だけど、先方は三度目ではあるし、イクラ母の實家とは言へ一廻りも違ふ男の許へ嫁くのは、など、煩悶に煩悶を重ねた末、嫁きましたのが[illegible]も過ぎて、[illegible]が禍を作る端でした。それからと云ふものは、もう死んだ氣で、何を見ても嬉しいとも、樂しいとも思ひませんで、世の味氣なく暮して居りましたので、旦那もホト〳〵持て餘したのでせふ、自家へ還ることは極々稀れで御座いましたよ、ハイ旦那は△△所の[illegible]でありました、彼是四年ばかり經たぬ月日を經つて居ました所、突然妾の父は病死をなさいますし繼母さんもかに子供を連れて、行方不知となり、亦旦那は旦那で[illegible]に浮身を窶すと謂ふので、妾はそれを好い口實として暇を貰つて其處を出ました。これぞもし〳〵妾の墮落の始まりで、御覧のやうな、身を苦める運命になつたのですよはゝ、[illegible]我儘な女で御座いまして、嘸不貞な奴と思召すでせう、はゝ、可哀相やすつて、有難うよ、爾うお仰で下さるのは貴女ばかりかしだが旦那様[illegible]して居つて、何う何しても矢つ張り何うすることもなりませんよ、爾うぢやなくつて、おやあんな[illegible]遊ばして。

（完）

査公

「コラ〳〵其所へ小便を垂てはいかん……」子供「お父さん僕だよ」査公「ナンダ貴樣か……」。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●小説 金の力

まつき子

其の二

(上)

『虎の威を借る狐と云ふ事があるからね』亭主の威光、金の威光を笠に着て、奥様々々で威張くさる妻君がまゝあるが、そんな妻君に限つて、内では君、御主人に一から十迄唯々と押へ付けられて、奴隷の様になんだよ、其埋合せに目下のものに威張るのみ、思へば氣の毒なもので、江戸の敵を長崎でうつ様なものだ。そこへなると吾輩の家庭では、左様なものを着せる事も出來にや、馬車に乘せるわけでもなけりや、まして避暑の、海水浴のと贅澤な眞似はやうさせんさ、然し一家の全権を任せてあるからね、小さくても一家の女王と云ふ格だから小言はなからうじやないか、金もなけりや意氣地も無い代り僕の方が唯命是從ふで、ねい〳〵だからね』

『まあ仰しやい朝寢して銀行に行くのが遅れたといつてお怒りなさいませんしね、御返りなすつては晩酌のお酒の肴が少ないツてお小言は仰しやいませんしね、オホ……』うつくしい若い妻君は微笑んだ。

『またさよちやんはそんな事云ふからいけないよ、お肴が少ないのなんのツて云つたわけじやない、さよちやんが痩せるから滋養分を多く取る様に心懸けにやいけない、といつた迄サ、又朝なんぞ、君僕の銀行の時間が遅れる迄も臥ましておくなんて、妻君優待もこれに上越すことはなからうじやないか、ハヽヽ』と、さも愉快氣に笑ふ。

『君』と云はれたのは主人公の神柳正吉とは親友の中川健二と云ふ法學士、主人公とは同窓であつたがまだ大學院に學籍を入れてゐる獨身ものである、神柳は二年前の學生時代から妻帯して一世帯持も大分馴れたものである、さよちやんと云ふのは美術學校の卒業生と云ふ評判、學生時代に稽古の水彩畵の横額と卒業の時の紺地が表裝されて今も自慢氣に飾られてあるが、別に此頃は畫筆なあらるゝを見受けた事もない。

中川は『又お心盡か、よし給へ獨りものを傍に殺生じやないか』とおこるでもなく、なぶるつもりでいつた。

『君は直ぐさう云ふからいかん、心盡じやないよ、全く客の前でも何でも妻は叱り飛ばさにや主人の威嚴を損ずる、と思ふのは間違だよ、えら張つた野蠻時代の遺風だよ僕等尊下長と云はれやうが、嬶天下と云はりやうが、かまはんいつでもかう妻君は手の上に受けとくサ、君も見習つておくがいゝ、文明の家庭と云ふものをね』

『さよちやん、今日はゆつくり中川君にも一杯やつて貰ふとしやう、例のお自慢のお手製料理でもね、お使があれば行つてくるよ、堂々たる男子はそんなもの買ふものかと威張るのもをかしなわけサ、ね君僕等豆腐買でも何でもやるよ』神柳は澄したものである。

敷き詰めた疊間の眞中に卓を圍んで、心合へる友と一盞を傾くるは心ゆくものである、まして日頃無趣味殺風景な下宿屋住居に厭きた中川は、神柳夫婦のさも睦ましげに、『どうもねえ君、妻君は年のいつたのに限るよ、内のさよなんか、赤子で困るよ、勸工場にゆけば簪子が欲しいね、人形が買ひたいね、そして、其方が僕よりよつぽど大事なんだからね』など、お安からぬを聞かされて、兎も角嬉り氣にちやほや待遇されて一杯機嫌うるはしく歸つた。

(中)

『さよ！、禮儀をしらんでもあんまりだないか、人の頭に乘せる帽子を大跨に跨ぐなんて、不作法なとがとてにある、何！氣がつかなんだ、そんなうかつだから人の足を踏んだりするんだよ、うつかりして足のあつたのが氣がつかなんだ、ちやとんなことをしても氣がつかなんだの、うつかりしておつたのといへば濟むのだね、えゝ頓馬な野郎め』事は食散らされ飲み荒された食卓を片付るべく勝手許に運びつゝあつたさよ子が微醉ほんのりとした頬を風にあてながら椽端に横はつてゐた夫の足を踏んだ失錯から持上つたのである。『どうもすみませなんだ御免遊ばせ』一つ失錯があればそれからそれへと尾を引いていつまでも責む夫の常法を心得たるさよ子は佗るに若かじとひた謝りにわび入るのである、いつも云はん事じやないよ、すまなんだといつたからつて一旦踏んだ足が元に戻るものか、何ともなかつたからよい様なもの、骨を折つたり火を落して火傷でもさしたらどうする、それでも詫ればすむのか、要するに人生をうかつに暮してるからだよ、うか〳〵毎日何しとる、殺潰しの米食虫とはお前達のことよその婦人を踏付にして』

『まああなたは直ぐあんなことを仰しやいますわ、妾本當に不調法で一寸足にさわつたんですもの許して下さいませ』泣かんばかりにさよ子は詫びた。『ウン、さうだらう、不調法に一寸ね』お前の輕薄な性質をよく云ひ顯はしてゐるよ、アヽつまらない妻君を貰ふ爲めに面白くもない銀行に朝から夕まで務めて、内では遊んで居つて貰つておまけに御機嫌とつてそれで足を踏まれたり客の帽子を跨いだりして、人の面に泥をぬられるし、引合ぬわけサ、決して美術家なんて上品なもの妻にするもんだない、僕等には下内職でもする下等なものが似合の夫婦だらうよ、どうだお前もモット月給の多く取れる處へいつては、お前位の容貌じや望み手はいくらでもあるよ、後補者をさがしたらどうか、僕等の樣な腰辨の其又腰巾着になつてるよりどこかの弗箱の旦那を見付たがよからうよ、第一お母さんへも貢げるしね。

(下)

神柳正吉はさよ子が美術學校の卒業もアト一年といふ間際に父に死なれて學資の出所なく弱つてゐるのを、憐んで資を貢ぎ日頃の戀を果したのである、して見れば戀妻の苦くからう筈はないが、愛し過ぎ馴れ過ぎのあまり、うら若きさよ子のあまり心なき素振をつれなしと思ひ初めて、聊かの行違を胸に持つては、口癖の様に學資金やさよ子の衣裝代を見積るのが常である、さよ子とて我れから望んだわけでもなければ時に味氣なく思はぬでもないが、兎に角五拾圓といふ月給にしばらるゝともなく、居止まつてゐるのである。

今日も朝出がけに靴の揃へやうが無細工で、枕は立つたまゝ濟し、いつもながら挨拶が粗略であるといふのが發りで、それからそれへと小言の移つた上句のこと。

『一體お前は何と思つてる、學資ばかりも二百や三百じやきかない大金を人に出させて、恩義も思はないで、人の手前優待すれば付上つて人を踏みつけにするも程がある、人を馬鹿にして、學資の立替、その後の衣裝代ばかりもどれ丈だと思ふ、コラさよ子默つてばかりゐては解らんじやないか』よゝと泣き伏す愛妻の横顏を恐ろしき眼光に睨めつけたが、幸にうつぶしてゐたさよ子は知らなんだ。

神柳正吉はうつくしく、然もまだ十七の愛妻さよ子の自己に對する愛の不滿を覺ゆる毎に、金の利々目へつけるので、あの年わの容貌でより以上の黄金の力、又はさよ子心底からの愛の働きでも起つた曉には……と内情を知れるたれかれはうわさしてゐる、又主人公も時々はうたゝねにさよ子が意氣投合せる青年と逃げたなど、いふ夢にうなされて起き上つて見て、やつと胸撫で下すともまゝあることである、果して共白髮まで親しくゆくものか、今は疑問にふした問題である。

八月十五日々記の一節(續)

ひで

へイ、私は門外に待たせて置きました、車夫さんを、餘り面倒が手間取りますから、返しなしやうと思ひまして、と答へしに、それでは、すぐはじめましやうとい出ゆへ然らば願いましやうと、終に車夫さんを返し、押印も取り用談も濟ませて門外に出づる暇を得ず其儘待たせ置き、石川兄に面會せしは午後二時頃にて監獄に着せしより、大凡四時間の消費なれば、車夫さん、何とか詫びん樣もなく、せめては往復の料を拂ひ我は徒歩せんのみと覺悟し、車屋さんに斯く云ひぬ、車夫さん、長く待たせて濟みません、斯く遅刻するを知らば早く歸りもらはんにそれも詮なき、今となり、定めて長時間待たせたる増賃を請求せらるゝならんが、恥かしき事にも、けふは全く小使ひなく心配せしも急用ありて、脱れ難ければ、自分も病を推して爰に來れるなり、固より約束の賃錢と貳錢斗りの餘裕はあるなれど餘り待たせたので、貳錢斗りの増賃で、往復車するに忍びず、如何にせんと云ひ出でけるに、どうせ、あちらへ歸りますもの事を分けてのお話しには御無理を申ません乘つてお出でなさいとの快き申出に、厚意ありがたし此暴風暴雨を安然に辿り呉れらるゝ厚意は他日亦遇ふ時に忘れせんと謝せしに車屋さんも、どう致しまして、そんなにお仰れては恐れ入ります、互に快く別れたる事の嬉しさを其日直ちに書きつけ置きぬ、實に、其日稼ぎの人にても、其性の善なる斯の如し、そを、車夫よ馬丁よと賤しむ權力階級資本家階級、恐らしさよ

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

社友之通信

▲神川松子女史より　御變りはありませんか、私事も本月末に上京するつもりでしたが、線路不通のため非常に困つて居ります、モー氣ばかりあせつてほんとに困つて居ります、しかしいづれ近きうちに上京いたします

▲藤井九七郎氏より　長々御無音致しました、殘暑の折柄御身體如何ですか、坊ちやん達も御健在ですか、私は昨日來より當淡路に遊ぶことを得ましたのですそれで美しいこの景色を御報じ致すのですが、何分筆が駄目ですので充分寫すなぞとはおこの沙汰ですからこんなもの（繪端書）に變ました

▲片山潜氏より　拜啓ヘーデー氏歡迎會に御來會下され難有く奉謝候、殊に御懇篤なる御慰問のお言葉を下され奉謝候、小生は家庭に關して常に困難を致し、愚妻は脆弱なる二子を連れて田舍へ老母の孝養を兼ねて參り候、來春四月頃に歸宅致す筈に候、夫れ迄は獨身生活を致し候此の地方御通過の節は御立寄り被下度候、手製の料理でも差上可申候、一の雜誌を經營致すは仲々困難にて彼是と他人は申候も、其の任に當りて見れば隨分イヤになる事も有之、貴姉御經營の御苦心に向つては、滿腔の同情を表し候、何卒御奮勵を願度候、右は草々敬具

▲平岡如雨氏より　拜啓其後は御無音申上居候、氣候の變遷に際し、思ひもよらぬ水出で特に御地方は甚だしき由雜誌上にて拜見し御見舞もがなど存じ居れども、先日來より些か恙ありしため靜と親しみ居り失禮申上候御社は如何に候や御伺ひ申上候定めし同情厚き女史の事とて自己の困難よりも他のために御多忙の事と察居候、何卒主義のため御自愛あらん事を懇禱致し候前紙小冊子葉（武村發園）貴紙の讀料に被成下度、小生は或任務にて十月十一月中は御不沙汰仕るやも難斗候、先は右御見舞旁御亂筆御免被下度候、匆々敬具

▲岩崎秋月氏より　如貴示一葉秋を報じ來り申候、村雨松風の山居已でに野の末には萩女郎花桔梗も優艶に咲き、武骨の我れを迎ふるもの丶如し、嗚呼、秋色の天我來す女史倍健乎、好時季御西遊奉待申上候

▲黒瀬春吉氏より　世界婦人前金切れに不係、毎號御送付被下有難く御禮申上候、扨私事急に都落ちを思ひ立ち、御目に掛る暇も無く、當地を出發致候に付、左樣御承知被下度く次號には雜誌代がわりに何か寄稿の心組に御座候

▲松岡佐子女史より　御壯健恭く拜見致候秋と申は名のみにて、尙暑さ烈敷候處貴姉には過般來御病氣にて御困難の御樣子何卒々々御自愛御專一に被遊樣奉祈候時代の犧牲兒が先驅として立たれ候御身之上、耐忍幾萬之女性のため大切の御身體決して一個人の御身と思召され間敷樣奉願候、私にして斯迄無學無能の女子たらざりせば、また貴姉に幾分の御助勢をも可申上候ものを口惜しや、天の此の身に才智を與ふる事、頗る吝にして何事を成すべき能力もなく殊に不幸にして普通の教育をさへ受け居不申、何かてゝくわへて近來は貧困に弄し候得ば何等の仕出すべき術も不得、せめては當地に於て貴誌の講讀者を募らんと思立ち御相談申上候處、早速御承知被下廣告紙として初號より御取りそろへ三百二十枚御郵送被下候は滿足見に不過候、漸次第直に着手可致候、就ては今後當地にては私の方より直接配達致度と存候、御承知の通り新聞購販と云ふ名稱を附せんとせば、新聞聯合組合に加入致等彼是面倒なる手續を要し候事故取扱所とか何とか簡單なる方法にて致度候普通の新聞とは事かはり孰れ家庭には容れられ難き事と豫想致し當初は兎も角私自から勸誘に努り近々には勸誘人を募集致し絕えず盛んに販賣致すべくの考に御座候、前日も申上候通り餘裕なき身の事とて募集に關する實費と多少の利益無之ては實行致しがたく候に付其邊何卒不惡御了知被成下度候間至急御返書御送附方願度候、右御許容被下候樣なれば新聞原價は如何程にて御送與被下候や御腹藏なく御漏し被下度く候、此の利を收め去るは甚だ不本意の至りに御座候へども只今の處は止むなき事と御さけすみ被下間敷願上候、果して幾何の講讀者を募り得るや甚だ覺束なき義に之れあり候へども、一度從事致し候以上如何なる困難をも排して主義鼓吹に極力盡すべき精神にて御座候、御地に在つては如何なる方法に依りて講讀者を御募り被遊候哉、市にては今幾何の愛讀を有し給ふや、參考迄御洩し被下度先は右荒々要用迄至急御返事奉待候早々

▲前田亮子女史より　拜啓其の後はまことに〳〵御無音に打過ぎ何と御詫の申上樣も之なく候何卒々々御免し被下度候はやすゞ風はださむき朝夕と相成候處先生には御さわりもいらせ給はず御過被遊候や御伺申上候夏にいたらぬ前より是非々々御伺ひ申上べく心がけつゝも余り御ぶさたいたし候ため相すまぬ心のいたし候てなほ今日まで心に御詫申つゝ失禮に打すぎ居り候不惡御推しの程念じ上候、毎度世界婦人御惠送いたゞき難有御禮申上候、久しく御なつかしき御姿にも接し得ぬ身の世界婦人を給はりし時はあだかも御拜顏を得しかと許りうれしう御座候意志薄弱の身も新光明に浴し候て尊き御教への程胸に止めてゆめ忘るまじく候幾年の後このふかき御恩に報ひまつるべき時あらむとそれのみ念じ居り候誌上にて承り候へば御令息樣には御渡滿の由さこそ先生も御淋しくおはし給ふことゝ存じ上候なほ先日御發送の時は非常に御多忙の由に承り候ひしが此頃は私も日々在宅に候まゝ何時なりと御差閊の折には參上致候

新刊紹介

「下僕の生涯」　前田晁一氏譯

有名なるト翁の作を譯述せしもの、原書を獨文に取りたりと云ふ、文面は一寸乾燥無味の樣なり、噛めば味あり、譯文の始終眞面目なるを喜ぶ、結構凛烈鐵をも裂く風雪の中に、主僕二色の光澤を對比せしめ、紛亂の道を經て各信仰の寂光に歸依したるとき、主は寒に堪えず氣絶せる僕の脊に驚かれ、幸なる僕べは其の後二十年を生き存へ、身は常に神のみ前にありて先きの日の放逸なく、最後の息をつく時には、長年つれそうた妻さへに消い感謝をなし、子や孫に別れ、喜んで、樂しんで、靜かにくあの世を望んで永遠へに目を眠りぬと云ふあらまし附き添へて「ズラテの珈琲店」に集れる各國各宗の信徒が各自の宗派を自慢せる折りから、一支那人在りて、一例を引き、神の惠みの普遍なるを說き、終に諸人皆信仰の最も善きものなるとを知り、其の宗派爭を止めたりと云ふ、寓話を掲げたり心ある人方には秋の讀物として上乘のものならん、定價二十五錢、發行所平民書房

●養雞新報　此の雜誌は養雞事業の普及發達を計り、併せて田園生活の妙味を傳へんが爲めに發行せるものなり、世間斯業の聲漸く盛ならんとす、殊に近來養雞業の如きは著しき進歩をなし、上下を通じて此の事業に從事する者多く、農商務省は種々なる方法を以て盛に普及しつゝあり、農家の副業とし或は婦人の内職として好恰の事業なり、僅十二ページの小誌なれども蒐むる所の記事豐富にして、趣味と實益を兼、最も平易に養雞法を敎んとするは、此の種の雜誌中稀に見る好誌なり、田園生活論、小學敎師の副業、雞肉料理、簡易養雞術、家庭の養雞、雞の管理及雞舍は其重なる記事、

吾人は啻に農家の副業のみならず、一坪の土地を有する人は必ず養雞に着手せられんことを勸む、殊に田園文學に着目せるは吾人の深く喜ぶ所なり、定價五錢、東京府豐多摩郡淀橋町字柏木二六四　養雞新報社

社會主義金曜講演
（ユニヴアサリスト教會にて）

予等今回新たに社會主義學術講演會を創め、毎週金曜日夜、神田區飯田町九段坂下ユニヴアサリスト教會に於て講演、質問、討論、談話の會を開く、男女有志の來會を俟つ（會費五錢）

第四回（九月廿七日午後七時）

發起人　堺利彥　山川均　幸德秋水

ユニヴアサリスト

第二卷第九號出たり　一年分四十錢

△迷信を打破し獸的慣習の消息を傳へ△科學宗敎調和の新信仰を鼓吹し△現代に適應すべき新道德の扶植を計るは本誌の特色なり△一年分に四十錢を添えて申込むものには村田勤譯「萬民救濟の福音」（定價壹圓五十錢六百余頁の大冊）を進呈すべし

東京小石川區小日向臺町二ノ二七

世光社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

此男女間の大文字を讀まざる人あるやあり

婦人世界

九月一日發行 第二卷 第拾號 壹冊拾錢 五冊壹圓 六冊五拾錢 郵税一冊壹錢 郵税共 九拾錢

△本號には千圓を面白く分配する大懸賞募集あり

◎果物を小兒に與ふる注意…博士
◎我は如何なる妻を望むか
◎私の感心せる奥様(三騎)
◎娘を嫁に遣りし實驗(原)
◎辨當の料理 弦齋夫人
◎少女讀者々好評小説以上

男女戀愛論 村井弦齋

出たり

△眞の戀愛は如何なるものぞ
△男子の戀愛は如何なるものぞ
△女子の戀愛は如何なるものぞ
△日本人は情と慾といづれがつよき
△東西婦人の愛情は孰れが濃やかなる
△戀愛は果して神聖か

◎大困難と戰ひし桐橋刀自
◎女中より成功せし主婦
◎不妊症全治實例…士 柳博
◎男に如何にして弄まるか
◎強情の子供を矯正せし實驗
◎感心な女學生(校長直話)

▲口繪▼名家令夫人◎名流令孃◎新婚寫眞◎其他種々

◎弦齋夫人の料理談 價六拾錢 郵税八錢
◉家庭菓子製法 價五拾錢 郵税六錢

東京京橋南紺屋町十二 實業之日本社 振替三六、三二番 各地賣捌書店

養雞新報

養雞は家庭の必要生産物にして又婦人の純好副業たり我が養鷄新報は從來の雜誌とに其選を異にし趣味豊富にして實益の記事多く養鷄の方法を通俗懇切に傳ふるを以て主旨とす故に我が養鷄新報は專業家たると副業家たると將又愛翫を主とせるものとを問はず苟も一羽の鷄を養ふ者は讀で趣味あり實益を得る好雜誌なり

●毎月一回廿日發行●定價一ヶ月五錢一ヶ年五十錢郵劵代用一割增

發行所 東京府豊多摩郡淀橋町字柏木 養鷄新報社

時代の要求により生れたるカメリヤは色白くきめを細かに艶を增し肌を滑かならしむる最新最良の洗粉なり年若き方々のみならず老年の御肌には殊に効驗著し

定價 大瓶廿五錢 瓶入十二錢 紙袋入五錢 小袋三錢

本舗 ライオン歯磨發賣元 東京神田柳原川岸 小林富次郎

山田幸一先生作圖

新約聖書 パレスチナ地圖

彩色摺 印刷鮮明 四六判 全紙 一枚摺

定價五拾錢 郵税六錢 (縦三尺六寸 横二尺七寸)

●野邊地由三右衛門君編 好地由太郎君懺悔錄

鐵窓の二十三年

菊判大形 定價卅五錢 郵税六錢

これは強盜、殺人、放火、破獄、强盜のため無期徒刑に處せられ獄中にて基督の救を受け出獄の恩典を蒙りたる人が己が犯罪の精密を自白せる趣味あり實益ある物語なり

●杉橋吉之助君著 諸病治療及諸法術原理

思念術 (寫眞版入)

定價三拾錢 郵税四錢

著者生來虚弱なりしが中年に及び故天然居士幸原俊郎先生の門に入り精神療法の奥義を究め今や頑强なる人に勝れる身となりしを喜び且つ故先生の高恩を紀念せん爲に玆に此書あり世の心身の健全の貢せらる、士幸に一讀の榮を給へ

◉田舍人の見たる 東京の商業 (精密なる東京地圖挿入)

書生パン店主 黒光女史 共著

定價三拾錢 郵税四錢

本書は田舍より東京に出で、實業を營まんとする士に於て最も一讀價値あるもの書生パン店主及び黒光女史の實驗より出づる良書なり

發兌 東京神田區猿樂町二ノ二五 中庸堂書店 貯金振替口座六、三〇番

新築落成移轉

小兒病 内科 外科 診療

府下淀橋町角筈(水道前) 淀橋醫院 竹下繁太郎

應需肖像畫

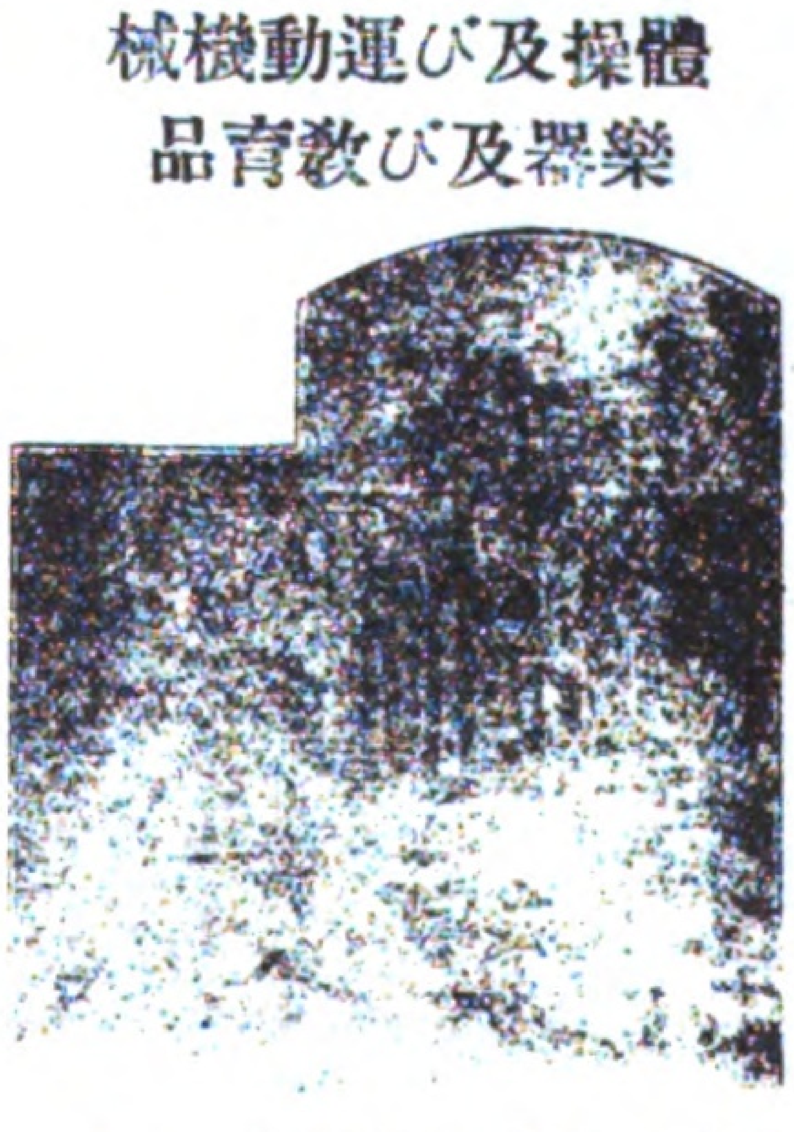
神田區美士代町一番地 浦田鳥城

內外大博覽會於受領 名譽金銀一等諸賞牌

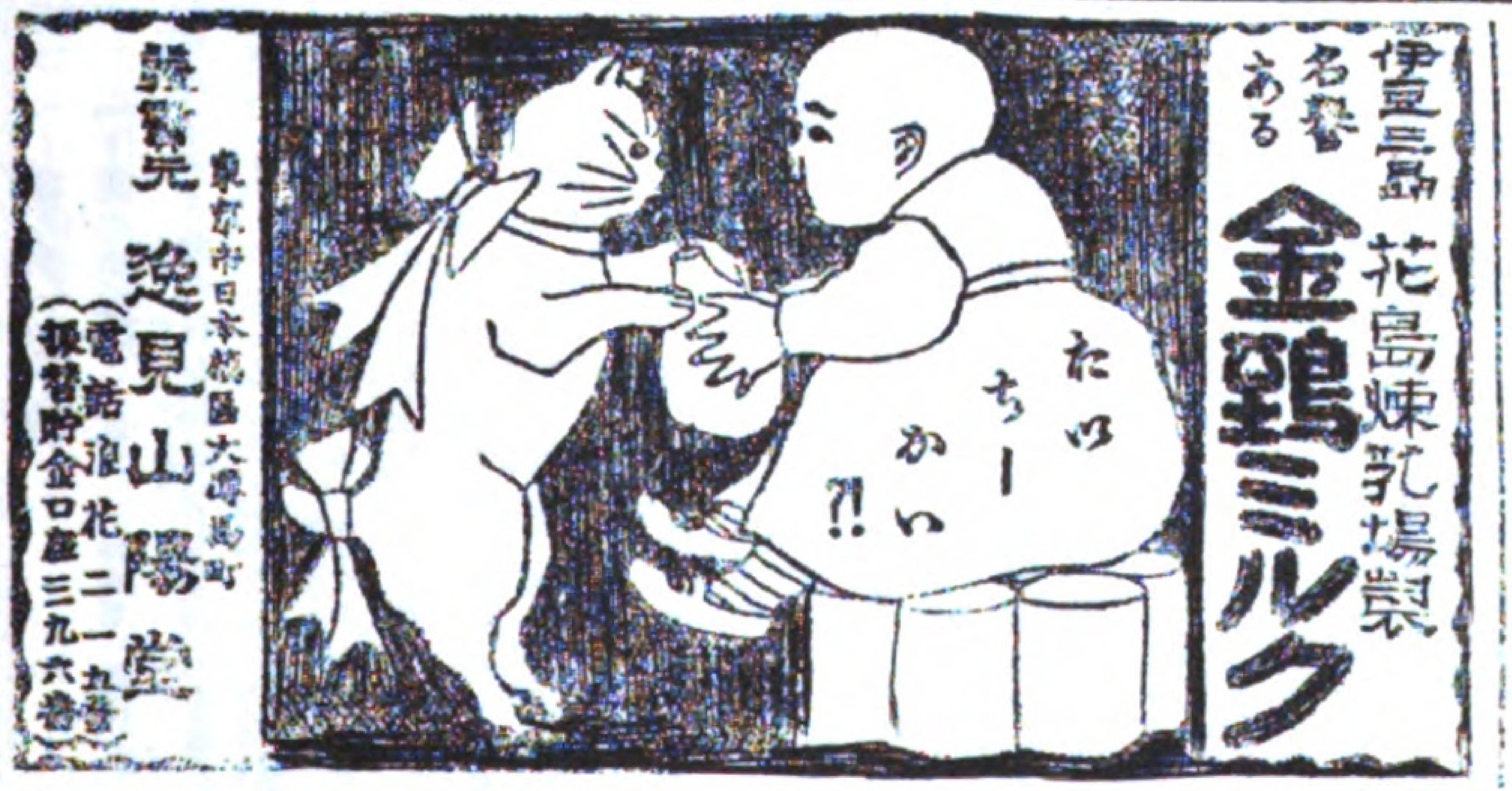
體操及び運動機械 樂器及び教育品

●階上體操器具及び樂器陳列

●諸君の縦覽を歡迎す



美津濃商店



腦病、神經病、精神病
東京腦病院
院長 後藤省吾
電話下谷三三〇二番

小兒科 內科 婦人科
毎日自午前八時至午後六時
小牧醫院

●歯科治療●
歯科醫 吉
自午前八時至午後六時
●學生勞働者●失明執者の便を計り夜間十時迄治療

◎定價 △一部四錢五厘、十部四十二錢、二十部八十錢 △申込は總て前金の事 △郵税當方持

編輯兼發行人 東京府豊多摩郡淀橋町字角筈七三八番地 神崎順一

印刷人 東京府豊多摩郡淀橋町字角筈七三八番地 遠藤友四郎

發行所 東京府豊多摩郡淀橋町字角筈 世界婦人社

印刷所 東京市日本橋區三十四番地 博文堂

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY